

— 書 評 —

新島淳良著

『自由思想家孔丘 論語 全訳と吟味』
(新地書房刊)

(東京大学教授) 戸川芳郎

中島みゆきのサウンド「異国」が好きな私は、書評の依頼をうけた途端に“民族の自由を護れ”の歌唱を口脣に蘇らせた。いずれも余曲をもって替えがたい旋律だ。聴く耳は一つなのに、“民族”と「異国」をうたうバックに30年のズレがある。

昨年1983年夏、高田淳氏の紹介とかで「彷徨」69・70号が舞いこんだ。新島私塾の連絡紙である。＜魯迅研究会＞や宅見晴海の死など、戦後期の東大・中文界限の出来ごとが、この書の著者の＜自伝のようなもの第二部＞のかたちで載っていた。その少し以前、「いま、中国研究をふりかえって」（「中研月報」421）を、中共党史を研究する文革世代のわかい友人が、新島発言に反撥の感情を隠しあえずに、持ちこんできた。また最近、著者の『歴史のなかの毛沢東』への高田淳＜書評＞（「アジア経済」23-8）をも、読まされた。そして、ひき続き「彷徨」紙が送られてくる。

著者新島氏の生き方を、戦後の進歩的知識人の一軌跡として、中国研究にかかわる同世代の“亀鑑”にしなければならないのかどうか、いずれ＜自伝のようなもの＞が公けにされるだろうから、それを待ってのことにしよう。ただ、座談にしろ自伝にしろ、問わず語りふうの思い違いを重ねないように、なるべく当時を知る構成係でもお相手して記録に留めてほしい。老境の著者の放談にしては、複雑な事件にからむ多くの人物が登場してくるのだから。とくにデートを正確にねがいたい。

ちなみに、私は＜魯迅研＞初期と末期の会員、東大・中文の出身。早稲田を辞した著者から、勧められて「愛児に樂園を」（ヤマギシズム幸福学園運動機関紙）1～19、「けんさん」（ヤマギシ

ズム運動広報紙）122～143を購読した。10数冊にのぼる著書については、『わが半生』（元満皇溥儀の自伝、共訳）と、たまに『中国現代教育史』（共著）を利用するほか、ほとんど読んでいない。

さて本書は、一種の教育啓蒙家の修養課本であって、新説を立てる研究書では、もとよりない。いわば、老境に入った著者の、なぐさめと励ましの書である。

評者の私は、といえば「論語」を現に使用する。漢魏六朝思想史の一材料として取扱っている。経学の訓詁・義疏は、当代の思想史資料としては訳経や史書・賦詩とならんで、量質ともに豊富な内容を伝える。とりわけ三礼と「論語」の活用のありさまやその多様な注釈を通して、当時の文化史的側面を窺う^{よすが}がとしてきた。「論語」も「世説」も、つまり同一価値の史的素材にすぎぬ。

しかるに、著者は「彷徨」最新号の広告に「新島私塾での講義に手を加え、論語の全訳と、孔子の仁を自由と解釈する「吟味」とから成る」とあって、本書が＜全訳と吟味＞を副題にし書名に＜自由思想家孔丘＞と冠したゆえんを説明する。私は、かえって驚歎しかつ自己嫌悪におちいった。

聖書講義のいくつかは、「新島論語」のようにして成ったのだろうが、それほど時俗に迎合する産物ではなかろう。「論語」のほうは、いまでも出せば売れゆきのよい出版界のドル箱という、各地のカルチャーセンター＜論語講座＞を見るがいい。

高度成長を支えた昭和ヒトケタ代は、中間管理職から経営中枢にひろくイスを占めつつある。女性対象の生涯教育も浸透した。リバイバル「渋沢論語」「穂積論語」ならぬ、80年代“教養ろんど”がほしいところだ。駅前での聖書普及活動よりは、いっそう実効的だ。

「吉川論語」「貝塚論語」「木村論語」のいずれも、時宜をえた老熟の作物として流行した。津田・宮崎・白川・渡辺・小倉の研究書も、専門家には必携書だ。評者の私もこれらに解題し、または出

版に手を貸したこと、一にして止まらぬ。いずれも従来の旧説のなにかしかを凌駕する。

著者はこれら「先人の業績の肩車に乗って」、ただし「平岡論語」「藤堂論語」は涉獵もれなのであろう、ともあれ〈集註本〉499章の本文を全訳しおえた。そして「吟味」は、旧漢学の正統を唯一いまに標榜する無窮会の「東洋文化」誌〈講経〉欄のごとき、護教的な説教臭など、さらにない。旺盛に諸学説をソシャクし、巧みに選択を加え、自分に好ましい「論語」つまり著者のいう「共働者として上演」する課本に仕立てている。

西順蔵氏の「あとがき」が、この際それを語り尽くしている。新島老師「の関心の焦点は孔丘晩年の学園にある」ようで、「孔丘先生の「仁」は自由のことだといい、「立つ」とは各人の自立のことだとして、自立的人間の自由で暖かい間柄を語っている」。孔子じしんの語は確定しがたい「にも拘らず、論語の語のなかから厳格に択んで、…論語のなかに孔丘の学園の朋友共同態の雰囲気を読みとった」のであろう、と。

この、2500年前の朋友共同態——孔丘学園の再発見と、かつてのヤマギシズム幸福学園の推進役、現私塾主宰者としての著者と、の関わり合いいかんについては、より適切な評者がある。

専評を一つだけ。思想史材「論語」として——。本新島書は近代文献批判の成果をふまえて、各章ごとの制作年代やその環境を随所に解説している。とすると、当然儒教〈経典〉として典籍成立後の、教学的解釈の変遷つまり経学史的追求をも視野に入ることとなろう。漢魏期の重点章節、隋唐期や宋学上のそれ、等々と各時代の思想史上の問題となった章節が、連綿とつづく。本書にも現に、近人金徳建（164ぺ）や唐暁文（276ぺ）など現代中国の解釈を紹介してもいるのだ。

例えば、305〈正名〉章の正名——礼楽論は、289〈君父・臣子〉章の名分思想とかかわって、需教史上、封建名教の主軸となって長期かつ執拗

に活用された。古くは君父身分秩序と孝悌徳を保守する立場から鄧析らの法的平等主義を忌避する表明とされ、孟子いらい「春秋」名分論と結んで墨家に対決し、さらに君主権強化をねらう「管子」・法家系の〈正名審分〉とも習合した。三綱五倫の成立する秦漢期には、董仲舒系の天人合一思想に組込まれて帝国統治の「君臣の義」が確立し、後漢期いごの礼教国家の政術応用を準備した。ただし、政教上もっとも意味をもつのは、宋代の尊王攘夷論の展開のなかでの、政治思想上の名分論ではなかろうか。これらは、本書の意図の埒外かもしれないが、現在の思想史専門家にとっての考察の重要な対象であり、修養課本でないもう一方の、史材「論語」のもつ意義と考えられる。

井筒俊彦氏の『意識と本質』（1983,岩波書店）は、比較哲学の分野を聳動させる問題提起を行い、我々を震撼させているが、その第Ⅺ章に古代中国の〈名実論〉として、現にうえの章節を分析しているのだ。「上下関係から自由な師弟関係を謳歌し」たあまりに、思想史上の功罪が消滅するような「論語」ではないことをも、本書の著者は十分わきまえているにちがいない。

最後に、本書の利用価値として、以下の二点。

上記の解釈ものや研究書を丹念に解説しつつ引用し、期せずして各書の書評の役割を果たしている。これは教育啓蒙家としての著者の卓越した資質を証するものであって、後学のためのよき文献解題である。特に宮崎研究書『論語の新研究』へは従来にない全面的な論評となっている。二つに、既成の学界や人的係累から自由な立場から、学术界への批判が真率に語られている。老境の私塾老師なればこそ、本邦学会のもつ朋党比周ぶりや夜郎自大のさまが透けて見えるのであろう。

これらの点からも、本書をわかい世代の研究者に、また著者の〈前半生〉にかかわりない階層に、ひろく勧めたい。

1984. 03. 29.

（1984年1月刊。四六判，404頁，2900円）